

もくじ
 学童集団疎開の祈念碑建立 … P1 足立民具図典①おいぬ様のお札 … P2
 はい、文化財係です② … P3 名家のかがやき・源長寺金剛力士像開眼法要 … P4

足立史談

第633号

2020年11月15日
 足立区立郷土博物館内
 足立史談編集局
 〒120-0001
 東京都足立区大谷田5-20-1
 TEL 03-3620-9393
 FAX 03-5697-6562



足立区学童集団疎開の祈念碑建立
 平和の礎に
いしづえ

祈念碑とその建立の思いを記した解説盤
 体験者の強い思いがあふれています。



第1回 平和事業展での展示
 2016年8月

博物館の協働グループ「足立の学童疎開を語る会」(以下「語る会」)は、実際に太平洋戦争中に学童疎開を体験した人たちが中心となり、戦後七〇周年を迎えるに向けて平成二〇五(二〇一三)年に結成されました。以来、足立区役所アトリウムで開催される夏の平和事業展への展示・解説活動を中心に、体験記や戦争資料の編纂、小学校へのゲストティーチャーなどの活動を通して、学童疎開とはどのようなものだったのかを説明し、子どもたちの受けた厳しくつらい状況を体験者として語り、戦争というものの理不尽さを風化させない、二度と起こしてはならないという気持ち、平和の大切さを伝えてきました。

「語る会」はこのたび、その思いを永遠に伝えるために、公益信託あだ



序幕の様子
 左列 「語る会」代表

ちまちづくりトラストの助成を受けて祈念碑を建立して足立区に寄贈し、十月十四日、博物館の中庭で除幕式が行われました。

祈念碑の形は、疎開先だった長野の山並みをイメージしています。「平和の礎に」という疎開体験者の思いを中央に、「長野県でお世話になりました」という言葉が添えられています。上下には集団疎開をした二十六の国民学校名、疎開の期間が刻まれ、戦中の歴史を伝えていきます。

博物館中庭は、道標や句碑、信仰の石碑など区の歴史と文化を伝える石造物の展示スペースとなっています。これらの貴重な石造物と一緒に、この祈念碑は、学童疎開の歴史と約七千名の疎開児童の気持ちを、郷土博物館に訪れる多くの人々に語り伝えていくことと思います。

あだち民具図典 ①
御嶽神社
おいぬ様のお札

足立の歴史文化を知る手立てとなる郷土博物館の収蔵する生活資料の紹介を行います。

■御嶽神社のお札

左の写真は、武蔵御嶽神社(青梅市)から配布されるお札です。大口真神(おおくちまがみ)とは、御嶽山を守る狼を神格化したもので、おいぬ様として敬われ親しまれてきました。江戸時代まで日本の山野には狼が生息し、山犬ともよばれていた狼は、恐ろしい動物と認識されると同時に特別な動物として神格化され、信仰された事例が全国的に見られます。御嶽神社の大口真神は、江戸時代のなかごろから、盗難除け、魔除けなどにご利益があるとされ信仰が広まりました。

御嶽神社は農耕にご利益があるとされ、榛名山の榛名神社(高崎市)とともに広く関東一円の信仰を集めていました。足立区では、地理的に

近いためか榛名神社への参拝や講の結成の事例の方が多くみられますが、大口真神は、盗難除け、火事除けといったご利益について深く信仰されていた様子がうかがわれます。

■ふたつのお札資料 郷土博物館の収蔵する同じお札のついた資料です。ひとつは立札型になっており、もうひとつは古めかしい物入れのふたの内側に貼られています。

立札型になっていているものは、このまま畑にたてて、畑作物の盗難を防ぐことを祈ったもので、本木西町の方に寄贈され、旧常設展示でも紹介していました。雨除けに片屋根がつけられ、表面にはガラスが入れられています。

物入れのふたの内側に貼られたものは、本木町の方に寄贈されたものです。(もう一枚は所蔵者の住所と名前です。「〇〇の所有ナリ」と明示してあります。)ふたを閉めるとお札は見えず、開けた時にお札が見える状態となります。なかのものが盗まれないように貼られたものでしょう。なかには四角いお膳が二列いっぱいに入っていました。資料の種類として

ではお膳の入った「物入」ということで衣食住の道具に分類されるものですが、おいぬ様のお札の信仰の状況を表す興味深い資料として保存しています。

■おいぬ様信仰の事例 昔の農家は土間の入口にあった、大戸とよばれる大きな引き戸や蔵の戸の内側に、おいぬ様のお札をよく貼っていました。毎年新しい札を貼っていくので、何枚ものお札が並んで貼られているのが見られました。泥棒が入らないように入り口にお札を貼ったのです。たくさんのお札は、泥棒を防ぎたい強い気持ち表れているようでした。お札がたくさん貼られた大戸や雨戸を資料として大切にしている博物館や古民家もあると思います。

大口真神のお札は現在も授与されていて、参拝の際にいただくことも多く、家のなかに貼っている御宅はそれほど珍しいわけではありません。

平成時代の初め、北総電鉄北国分駅が開業間もないころ、駅の周囲にはまだまだ畑がありました。人通りが多くなって作物がとられるのか、おいぬ様のお札の立札がいくつも立

てられているのを目にしました。このお札を作物盗難除けとして実用しているのは珍しく、驚いた記憶があります。

実際の盗難にお札の効果を求めるのは難しいので、お札を貼れば盗難に合わないということを感じていたというより、盗もうとした人が、お札を目にしたときに「神罰」のようなものを気にしてひるむことを期待したのではと想像されます。

御嶽神社では「おいぬ様」にちなみ、愛犬についての御祈禱や愛犬のお守りの授与もあるようです。参拝者の要望から始まったということですが、人々の生活や価値観が変化すると、新しい「祈り」が生まれるという事例なのかもしれません。

(郷土博物館学芸員 荻原ちとせ)





上：左から寛文6年銘 天和2年銘
元禄4年銘 正徳3年銘
下：発見された文字（一番左の庚申塔の台座部分）

はい、文化財係です²²

来迎寺の庚申塔

—文化財保護に伴う新発見—

十一月三日は文化の日。文化の日を挟んだ日から七日にかけての一周間は、文化庁の推進する文化財保護強調週間となっています。その趣旨は、国民に文化財への関心を高めようということで文化財の保護を推進しようというものです。文化財を保護するには、国民・区民の皆様のご理解が欠かせません。

文化財を保護していくには、清掃や虫干しといった日常管理、状態が劣化してきた場合には適切な保存措置を行う必要などがあり、通常は文化財の所有者がこうしたことを行っています。そして、その人手や費用は、所有者にとって大きな負担となります。つまり、所有者のご理解なくしては、文化財を保護していくことはできないのです。

ところで、文化財を保護していく中で、時には新たな発見もあります。そこで今回は、保護措置を講じる中で新たな発見のあった来迎寺（島根三十一一九）の庚申塔についてご紹介いたします。

■来迎寺 正式には照涼山阿弥陀院

来迎寺といい、真言宗豊山派の寺院です。創建は建久六年（一一九五）と伝わり、天和年間（一六八一〜八四）に再興されたといわれています。

■庚申塔とは 庚申塔は庚申待（こうしんまち）という信仰行事に関する石造物です。青面金剛（しょうめこんごう）が邪気を踏みつける様子や庚申の「申」（さる）にちなんで三猿が彫られたりします。足立区内には庚申塔が多数残されており、現時点で一五〇基を超える庚申塔が足立区登録有形民俗文化財となっています。その内、四基（寛文六年（一六六六）銘・天和二年（一六八二）銘・元禄四年（一六九二）銘・正徳三年（一七一三）銘）が来迎寺にあります。

もので、「江川□左（衛）門・森長佐兵衛・川名武左（衛）門・対馬安兵衛・田中四郎兵衛・宮崎五郎兵衛・牛込利右（衛）門・川名□左衛門」という八人の名前が彫られています。島根村の名主をつとめた牛込氏をはじめとして、近隣の有力者の一族とみられる人々の名前が彫られています。

寛文六年および天和二年の庚申塔があることは、来迎寺が天和年間に再興されたという寺伝を考えると興味深いものがあります。人々が庚申待をするほど安定した生活ができた、来迎寺再興の機運が高まっていったのかもしれない。

埋まっていた部分は庚申塔の台座として利用されており、この台座と庚申塔が同時に作られた一体のものとみた場合、島根村の庚申待が幅広い階層の人々に信仰されていたことを物語るものとなります。一方で、台座の文字と庚申塔本体の文字の彫り方の違いなどから、庚申塔と台座は別々のもので、何らかの契機に庚申塔と一体のものとして利用されるようになったという見方もできます。その場合、八人が来迎寺に何らかの石造物を奉納したことになり、来迎寺が近隣の人々から崇敬されていたことを示すものとなります。いずれにしても、今回の文字の発見は、島の歴史を解明していく一助となる貴重なものでした。

■新たな文字の発見 来迎寺の四基の庚申塔には、ご住職のご配慮により、新たに台座が設置されました（写真上）。そして、工事のために庚申塔を土中から抜き取った時、埋まっていた部分に文字が彫られているとがわかったと、ご連絡いただきました。

文化財は、所有者のご尽力によって保護されています。今回の発見もその過程で明らかとなったもので、大変貴重な発見でした。

文字が判明したのは寛文六年銘の

文化財は、所有者のご尽力によって保護されています。今回の発見もその過程で明らかとなったもので、大変貴重な発見でした。

（文化財係学芸員 佐藤貴浩）

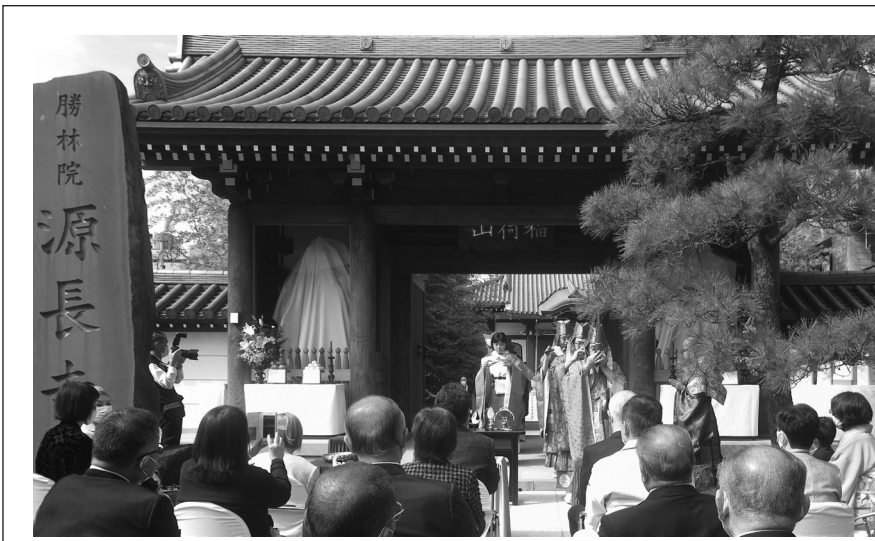
足立区域は、江戸時代に入ると江戸近郊の農村として開発されて大きく発展した地域です。開発人として、この地に入植した家が二百年の間に大きく力を蓄え、地域のなかで重要な役割を果たすとともに、文化芸術に親しみ深い教養を蓄えていました。また時勢に合わせ、地域を超えた広い視点での事業を展開していったこともわかってきました。

江戸時代のはじめから連綿と、力強く生き生きと活動してきた名家の様子と、そこに伝えられた貴重な資料を「かがやき」と称しました。

今回は、掃部新田（千住掃部宿）の開発人である石出掃部介吉胤家とその石出家と深く親戚関係にあった杉戸の濱田家、そして小右衛門新田（現在の中央本町付近）の開発人である日比谷家と、区内の二つの名家を中心にとりあげます。名家に残された貴重な資料をご覧ください。

足立区域は、江戸時代に入ると江戸近郊の農村として開発されて大きく発展した地域です。開発人として、この地に入植した家が二百年の間に大きく力を蓄え、地域のなかで重要な役割を果たすとともに、文化芸術に親しみ深い教養を蓄えていました。また時勢に合わせ、地域を超えた広い視点での事業を展開していったこともわかってきました。

間もなく開催！
文化遺産調査特別展
名家のかがやき
近郊郷士の美と文芸
会期 11月29日(日)～
2月23日(祝・火)



法要の様子と姿を現した金剛力士像
左 阿形・右 吽形
(2004年完成の山門とともに(株)三浦工務店の施工)
撮影：相川勤之介氏

一〇月一六日、源長寺（千住仲町四一）の山門の金剛力士像の開眼法要が執り行われました。像は、本体二・三メートル、台座を含めると三・一メートルの高さになります。木曾ヒノキを用い、四年の歳月をかけ秩父の工房で制作されました。山門は旧街道に向いており、道行く人々もその大きな姿を拜むことができます。新しい金剛力士像は、これから長く千住のまちとその歴史を見守り続けていくことでしょう。

源長寺には千住の堤防（掃部堤）の築堤を行った石出掃部介吉胤の墓所があり、足立区有形文化財（史跡）に指定されています。

名家の菩提寺
源長寺の金剛力士像（仁王像）開眼法要
こんごうりきし